

平成21年 6月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520300
 研究課題名（和文） 古辞書・ロシア資料による日本語形態音韻の研究
 研究課題名（英文） Study on Japanese morphophonology used by Japanese old lexicon and the documents recorded through crilic
 研究代表者
 江口 泰生（EGUCHI YASUO）
 岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
 研究者番号：60203626

研究成果の概要：

本研究は古辞書やロシア資料（江戸時代の日本人漂流民の言葉をロシア文字で写された文書）を用いて、日本語の形態音韻的現象について研究したものである。『名語記』のオノマトペを分析、鹿児島漂流民ゴンザの資料のCD-ROM化して研究対象を使いやすくしたり、『世界図絵』の語彙索引を作成した。またレザノフ資料を用い、東北方言の語中カタ行の有声化を明らかにし、方言研究会全国大会で発表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,300,000	0	1,300,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,900,000	270,000	3,170,000

研究分野：国語学

科研費の分科・細目：日本語学 3002（H）、日本文学 2901（G）

キーワード：日本語史、文献学

1. 研究開始当初の背景

江戸時代にロシアに漂流した日本人がいた。彼らはロシア人への情報提供者となってロシア語を薩隅方言（鹿児島方言）に訳したり、彼らの話す日本語がロシア文字で写されたりした。これをロシア資料とよぶ。このロシア資料は音素文字で表記されていて、かつ

口語的な方言で書かれているので、江戸時代の方言の生の姿が分かる。それにも関わらず、さほど研究がなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究はロシア資料に反映する方言の問題としてだけでなく、形態音韻論的現象が古辞書などの中央語にどのように出現してい

るか、という視点を絡めることによって、日本語史の問題として立体的に扱おうとするものである。

従来、古辞書の研究は辞書の系統・派生などの辞書史研究、あるいはその典拠などの辞書成立研究など、専ら辞書の書誌的側面に主眼がおかれ、掲載してある語の語学的分析は、それらの書誌的側面の解明を前提としておこなわれてきた。

本研究はそうした現状を踏まえた上で、『名語記』などの古辞書に出現する語形を対象として、それらの語形が日本語史においてどのような意味を持っているのかを明らかにしようとするものである。

ロシア資料を対象として、18世紀薩隅方言の助詞ノの撥音化、促音・撥音の音価、エ列化の問題などを考えてきたが、こうした現象の諸形式を古辞書から探索し、逆に日本語史を再構築してみようとするのが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

上述の目的のために以下のような方法で遂行する。

(1) ゴンザ資料については資料をPDFファイル化したり、索引を作成したりして、利便をはかること

(2) ゴンザ資料以外のロシア資料、たとえばレザノフ資料やタタリーノフ資料について基本的な性格を明らかにすること

(3) 中央語と方言との共通点や相違点について、形態音韻論上の問題を明らかにすること

4. 研究成果

(1) 撥音については、これまでもゴンザ資料を対象に述べたことがある。さらに語彙を和語、漢語、擬音擬態語、外来語などの語種

にわたる必要性を説いたことがあるが、これらに関して、古辞書の擬音擬態語については①で学会発表し、②で論文にまとめた。

①2005.7 平成17年度岡山大学言語国語国文学会(岡山大学 平成17年7月10日)『名語記』の語彙

②2006.5 鎌倉時代擬音擬態語の特殊拍『筑紫語学論叢 II』(風間書房 査読あり p140~157)

『名語記』の中で、「一ム」とある擬音擬態語には以下のようなものがある。

物の片端のチムと跳ね上がる、チム如何
(3-34 ウ)

ヅ(上濁)ムと越えよと言へる、ヅム如何
(4-78 ウ)

物を撥ぬるにブム(上濁上)と言へる如何
(5-67 オ)

これらはすべて撥ねることに関係している。ただし、チムチムのように2回繰り返すのではなく、1回だけ用いられるのが特徴である。薩隅方言の撥音は、このような意味的な限定はなく、音配列上の規則のもとに実現しているという、形態音韻論上の差異がある。

(2) ロシア資料の中でレザノフ資料に関しては、以下のような口頭発表を行い、敬語マスについて⑤、ハ行の音価②、カタ行の語中有声化①、方言語彙③④、資料成立における新蔵の役割②、を明らかにした。現在これらについて活字化すべく努力している。

①2008.11 日本方言研究会 レザノフ資料の日本語(於 岩手大学 平成20年11月1日)

②2008.8 第222回筑紫日本語研究会 レザノフ資料の日本語(於 九重共同研修所 平成20年8月7.8.9日)

③2008. 3 第 219 回筑紫日本語研究会 レザノフ資料の子音有声化 (於 熊本大学文学部会議室 平成 20 年 3 月 30 日)

④2006. 12 筑紫日本語研究会 レザノフ『日本語学習の手引き』について (於 九州大学文学部会議室 平成 18 年 12 月 26 日)

⑤2005. 8 筑紫国語学談話会 (於 九州大学共同研修所 平成 17 年 8 月 4 日) ロシア資料の敬語

レザノフ資料が日本語史、方言研究にどのように寄与しうるか、基礎的な研究になると思われるし、ゴンザ資料との相違も明白になったと思う。日本とロシアの交渉において、これらの資料が果たす役割も大きい。また語学的には、東北方言のカタ行子音有声化は音声現象ではなく、ハ行転呼や連濁と同じような形態音韻論的な働きが大きいことも述べた。かつて日本語の語中尾において、有声-無声の対立が非関与的だったのではないかと考える立場があるが、現代までに役割に大きな変化があったことになる。

(3) ロシア資料や佐賀戯作資料については、以下の論文・発表で佐賀戯作やロシア資料について紹介し、佐賀方言バイの意味記述を試みた。まず活字論文にすることが必要である。

①2006. 2九州方言文献二種 (明治書院『日本語学』2006-2 査読なし)

②2006. 6 平成 18 年度九州大学国語国文学会 (於九州大学留学生センター国際ホール 平成 18 年 6 月 4 日) 佐賀方言戯作の文末表現

③2006. 3 平成 18 年筑紫国語学談話会 (於熊本大学くすのき会館) 佐賀方言の文末表現
佐賀方言のバイは中央語のワイとの類似が指摘できそうで、中央語との関係や方言独自の発展を明らかにすることが出来そうで

ある。かつて背負う・担ぐ表現の東西方言差を明らかにしたことがあるが、中央語ワイが九州方言においてバイになるときにどのような事柄が生じたか、という点で重要な指摘になると思う。

(4) さらに、こうした学会発表や研究発表によって、以下のような活字論文や辞書項目を執筆することもできた。特に①にはゴンザ訳『世界図絵』の語彙索引が収録してあり、ゴンザ資料研究やコメニウス研究、『世界図絵』研究、薩摩方言研究の重要な資料になると思う。

①2009. 2 「古辞書・ロシア資料による日本語形態音韻の研究」 科研報告書 p 207

2009. 4 「ロシアに渡った薩摩の少年」 大修館書店『これが九州方言の底力』p178～179

2009. 6 項目執筆 「連濁」「ゴンザ」「濁音」「音韻資料」(朝倉書店『方言学事典』)

2008. 1 項目執筆 『鶴林玉露』『日本館訳語』『日本寄語』『日本風土記』(朝倉書店『日本語学大事典』)

2006. 8 項目執筆 「ロシア資料」(朝倉書店『日本語学大事典』)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

本研究課題により得られた研究成果

[雑誌論文] (計 2 件)

1) 江口 泰生 2006. 5 鎌倉時代擬音擬態語の特殊拍 『筑紫語学論叢 II』(風間書房 査読あり) p140～157

2) 江口 泰生 2006. 2九州方言文献二種(明治書院『日本語学』2006-2 査読なし)

〔学会発表〕(計 8 件)

1) 江口 泰生 2008.11 日本方言研究会
レザノフ資料の日本語(於 岩手大学 平成
20年11月1日)

2) 江口 泰生 2008.8 第222回筑紫日本
語研究会 レザノフ資料の日本語(於 九重
共同研修所 平成20年8月7.8.9日)

3) 江口 泰生 2008.3 第219回筑紫日本
語研究会 レザノフ資料の子音有声化(於
熊本大学文学部会議室 平成20年3月30日)

4) 江口 泰生 2006.12 筑紫日本語研究
会 レザノフ『日本語学習の手引き』につい
て(於 九州大学文学部会議室 平成18年
12月26日)

5) 江口 泰生 2006.6 平成18年度九州
大学国語国文学会(於九州大学留学生センタ
ー国際ホール 平成18年6月4日)佐賀方
言戯作の文末表現

6) 江口 泰生 2006.3 平成18年筑紫国
語学談話会(於 熊本大学くすのき会館)佐
賀方言の文末表現

7) 江口 泰生 2005.8 筑紫国語学談話会
(於 九州大学共同研修所 平成17年8月4
日)ロシア資料の敬語

8) 江口 泰生 2005.7 平成17年度岡山
大学言語国語国文学会(岡山大学 平成17
年7月10日)
『名語記』の語彙

〔図書〕(計 2 件)

1) 江口 泰生 2009.4 「ロシアに渡っ

た薩摩の少年」 大修館書店『これが九州
方言の底力』p178~179

2) 江口 泰生 2009.2 「古辞書・ロシア資
料による日本語形態音韻の研究」科研報告書
p207

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

辞典など原稿

1) 江口 泰生 2009.6 項目執筆 「連
濁」「ゴンザ」「濁音」「音韻資料」(朝倉書店
『方言学事典』)

2) 江口 泰生 2008.1 項目執筆 『鶴林
玉露』『日本館訳語』『日本寄語』『日本風土
記』(朝倉書店『日本語学大事典』)

3) 江口 泰生 2006.8 項目執筆 「ロシ
ア資料」(朝倉書店『日本語学大事典』)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江口 泰生 (EGUCHI YASUO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教
授

研究者番号：60203626

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし